



土木史フォーラム

Newsletter of Committee on Historical Studies in Civil Engineering
Japan Society of Civil Engineers

No.25 2003.12.

目次

土木史ニュース	平成15年度 選奨土木遺産	1
フォーラム	「技術の記憶」と「地域の記憶」の伝承としての土木遺産	横内 憲久 2
地域のニュース	江ノ島にて明治中期の煉瓦造温室遺構が出土	栗原 岳 3
	東京湾海堡シンポジウム報告～明治大ロマン 第三海堡のフロンティア精神	岡田 昌彰 3
海外土木史	イギリス土木学会「土木史研究委員会」年次会議への参加報告	五十畑 弘 4
関連団体ニュース	日本アーカイブズ学会(仮称)発足準備大会報告	昌子 住江 5
文化財ニュース	文化財ニュース(文化財となった土木構造等一覧)	北河大次郎 5
		阿部 貴弘
学会の動き	平成15年度 土木学会全国大会報告	日野 智 6
	第28回土木計画学研究発表会・秋大会報告	山田圭二郎 6
	土木史自由投稿論文発表部門募集案内	7
土木史関係図書	「水の都と都市交通」「景観学研究叢書 テクノスケープ」	横松 宗治 8

土木史ニュース

平成15年度 選奨土木遺産

No.	対象構造物(竣工年)	認定書に記載する趣意文	支部	所在地
1	稚内港北防波堤ドーム(昭和11年/同55年復元)	海陸の連絡を波飛沫から防護する類例のない設計であり、原形保存に徹した復元と補修で次代へと受け継がれるドーム型有覆防波堤。	北海道	北海道/ 稚内市
2	狩勝峠鉄道施設群(明治40年/昭和41年廃止) 大築堤群、新内隧道、小笹川橋梁	根室本線の開通時に建造された鉄道施設遺構群。山裾に沿ったS字曲線の大型築堤、隧道、橋梁からなり、北海道の東西連絡と拓殖に寄与した。	北海道	北海道/ 新得町
3	上郷温水路群 長岡温水路(昭和2年) 大森温水路(昭和4年) 水岡温水路(昭和12年) 小滝温水路(昭和18年) 象潟温水路(昭和25年)	鳥海山からの融雪水による冷水害対策として、水路幅を広く、水深を浅くし、落差工を連続させた日本で初めての温水路である。	東北	秋田県/ 象潟町
4	最上橋(昭和15年)	最上川に架かる最上橋は、3連の美しいリブアーチ橋の姿、調和のとれたバルコニーと高欄が歴史を物語る貴重な土木遺産である。	東北	山形県/ 寒河江市・大江町
5	関宿水閘門(昭和2年)	利根川改修事業のシンボリック的存在で、数少ない現役の大型水門(8門)と、船の航行のための閘門。	関東	茨城県/ 猿島郡・五霞町
6	千葉渠水道局千葉高架水槽(昭和11年)	多角形(正12角形)の配水塔は稀であり、屋根は円錐、踊り場がコーニス風に突出したデザイン。	関東	千葉県/ 千葉市
7	御勅使川堰堤群 源・藤尾・芦安堰堤(大正9年) 源堰堤(大正11年) 藤尾堰堤(大正7年/同15年改修)	大正期の砂防堰堤で、当時最大級の高さ、大きさ、及び美しさを持つ、最初期の練積堰堤群。	関東	山梨県/ 南アルプス市
8	大井川橋(昭和3年)	橋長1026.4m、17径間のトラス橋で、上下部工ともに当初の優れた姿をよく残し、戦前では同形式として最大級の道路橋。	中部	静岡県/ 島田市・金谷町
9	鬼ヶ城歩道トンネル{本本隧道}(大正14年)	尾鷲地方の煉瓦トンネル群の一つで、よく整えられたデザインの抗門を備えた、大正期最長の道路用煉瓦トンネル。	中部	三重県/ 熊野市
10	柳ヶ瀬隧道(明治17年/道路化)	明治17年完成当時日本最長(1,352m)で、黎明期の技術進歩に大きく貢献した。今も使用中では2番目に古いトンネルである。	関西	福井県/敦賀市 滋賀県/伊香郡・余呉町
11	友ヶ島砲台群 第三砲台(明治25年) 第二砲台(明治31年)	フランス式布陣の5箇所の砲台から成り、発電施設など当時の最先端科学技術の粋を結集し、それを今に伝える貴重な文化財である。	関西	和歌山県/ 和歌山市
12	東西用水酒津樋門(大正13年)	大正13年に完成し、取水樋門・南配水樋門・北配水樋門からなり、現存し今も活用されている水門としては国内最大級のもの。	中国	岡山県/ 倉敷市
13	千本堰堤(大正7年)	大正7年に竣工した山陰初の近代水道施設であり、外観は御影石で覆われた重厚な雄姿を持ち、今も活用されているもの。	中国	島根県/ 松江市
14	男木島灯台(明治28年)	総御影石造り無塗装の灯台は、完成から100年を越えた今も、備瀬瀬戸を航行する船舶の安全を見守っている。	四国	香川県/ 高松市
15	出島橋(明治23年/同43年移設)	米国から輸入されたトラス橋で、わが国で供用中の鉄製橋梁の中で最も古く、重要な近代化遺産。	西部	長崎県/ 長崎市
16	東と賀地区大搦堤防・授産社搦堤防 大搦堤防(明治4年) 授産社搦堤防(明治中期)	明治期前半に築かれた最大規模の有明干拓堤防で、現在も道路や二線堤として機能するとともに、石積みの景観がすばらしい。	西部	佐賀県/ 東と賀町
17	鹿児島港旧石積防波堤 (明治38年/平成5年改修)	水族館と一体化して整備され、市民の憩いの場所として保存活用されている大規模で美しい曲面を持つ巻石防波堤。	西部	鹿児島県/ 鹿児島市

「技術の記憶」と「地域の記憶」の伝承としての土木遺産

土木史フォーラム小委員会委員長 / 日本大学 横内 憲久



「土木史フォーラム」で、土木遺産や建築遺産などを保存・保全する価値や意義を述べるのはいまさらの感であるが、土木遺産等の意味が、構造物自体が有している技術論や建設の背景などだけでなく、それらを含めた周辺環境や景観的価値にまで広がってきている現状をみると、もう一度土木遺産等のあり方を考えるよい機会であるといえよう。

これまで「土木史フォーラム」では、おもに「文化財ニュース」の欄で歴史的土木構造物等の貴重な情報を提供・蓄積してきた。また、土木史関係の図書、地域ニュースや各種イベントなどの紹介なども精力的に行われてきた。これらは、先達の土木構造物等への考え方・工夫、さらには技術への畏敬の表われであり、それらを後生へ伝えるための記録でもある。換言すれば、「技術の記憶」の伝承といえ、この伝承のための「技術の記録」が土木史研究の根底を支えているのである。

一方、近年、歴史的土木構造物等そのものを、単体として記録に残すだけでなく、土木遺産とそれを包含しているまちや周辺の地形・気象・植生等（環境）と一体となった景観や地域として活用しながら、その土木的価値に磨きをかけていこうとする傾向が顕著になってきた。この方向は「技術の記憶」とはまた異なる、土木遺産等と地域が一体化した「地域の記憶」の伝承を主眼においた動きと捉えられよう。

まちづくりの核あるいは一環として土木遺産等を位置づけて、まちの活性化に寄与させようとする試みはこれまでも行われてきた。しかしながら、それらの多くは必ずしも大きなムーブメントとはならなかった。その要因は多々考えられるが、土木遺産の価値を建設等に関わった人や技術の紹介に重きを置き過ぎ、それを残してきた器ともいべき地域の個性（環境）を、いわば添え物的に扱ってしまったため、面的なまちの活性化までには至らなかったことが上げられよう。たとえば、このところ注目を浴び始めている、近代化遺産群が醸し出す、「廃墟景観」などは、構造物等よりもむしろそれらを残すことに貢献した環境としての風土への評価が高いのである。このことは、この事例ばかりでなく、これからの歴史的土木構造物等の保全等は、「技術の記憶」ばかりでなく、「地域の記憶」づくりと一体となって行われることによって担保されることを示唆していよう。

そこで、次号から「土木史フォーラム」では、これまでの個々の歴史的土木構造物等の紹介・記録に加え、これらが現在のまちのなかでどのように活用され、そのことによって新たな役割や価値、意味などを現出させたかを何回かのシリーズとして探ってみることにしたい。

会員の皆様にも、歴史的土木構造物等が、歴史的価値だけでなく、地域の活性化などに生かされている事例をご紹介いただければ幸甚である。



駅舎、船だまり、事務所等の土木・建築等の近代化遺産
そのものを現在にも生かしてまちの活性化を促した

写真1 北九州市・門司港レトロ事業



臨海鉄道線のレールだけを残し、歩行路として再活用することによって、地域の記憶を伝承している

写真2 横浜市・汽車道

地域のニュース

江ノ島にて明治中期の煉瓦造温室遺構が出土

栗原 岳

遺構が発見されたのは神奈川県藤沢市江ノ島の旧江ノ島植物園敷地内。

同園の歴史は明治15年頃、英国人商人サムエル・コッキングが約1万平方メートルの土地を購入し私設植物園を開設したのに始まり、温室はその一画に設けられた。コッキングの没後、関東大震災により温室は倒壊し園内も荒廃していたが、第二次大戦後藤沢市が土地を取得し整備を行ない一般公開されていた。今回、園内に併設されている燈台の改築に伴い一時閉園した際に藤沢市が発掘調査を行った。出土した遺構は4棟の温室の煉瓦積基礎部分とそれに付帯するボイラー室、貯炭庫(いずれも地下室)、地下水槽、アーチ構造の地下通路等でその面積は約660平方メートルに及び、明治中期以前の我国に於ける温室施設としては最大規模の物である。組積法は主にイギリス積と長手積が用いられているが、一部にフランス積が見られるのが興味深い。また、煉瓦の平の面には3種類の刻印(社印)が見られ、うち2種は製造元不詳であるものの、1つは明治21年創業の「横浜煉化製造会社」の物である事が確認された。

従来、温室の建設年代については明治18年という説が一般的であったが、発掘調査以前から筆者は園内に

同社製の煉瓦が多数散乱していた事に着目し、明治21年以降に建設された可能性について指摘していた。今回、基礎部分からもこれが発見され筆者の説が裏付けられた結果となった。

藤沢市では出土した遺構の文化遺産としての重要性を認識し全てをほぼ現状のまま保存、新たに見学用通路等の設置を行なった上、園名を「サムエル・コッキング苑」と改称し一般公開を開始した。ただし地下部分に関しては保存維持及び保安上の理由により通常非公開となっている。今後、見学会等地下部分の公開される機会が増加する事を期待したい。



フランス積側壁の地下通路

東京湾海堡シンポジウム報告～明治大ロマン 第三海堡のフロンティア精神～

(平成15年12月13日、横須賀芸術劇場大ホール於、主催:国土交通省関東地方整備局東京湾口航路事務所、共催:横須賀市)

近畿大学 岡田昌彰

ペリー来航150周年の記念行事である「東京湾海堡シンポジウム」は、国土交通省関東地方整備局東京湾口航路事務所の主催により、「明治大ロマン 第三海堡のフロンティア精神」と題して開催された。東京湾口航路は現在も首都圏の物流にたいへん重要な役割を果たしているが、航路上に位置する人工島「第三海堡」(1921年竣工)の残骸が長く船舶航行上の難所となっていたことから、2000年にその撤去工事が着工した。第一・第二海堡(いずれも現存)と合わせたこの3つの「東京湾海堡」は軍事技術史の上でもたいへん貴重なものとされており、同事務所は撤去工事に並行して海堡の歴史的評価や各種の関連調査を積極的に行ってきた。その成果を調査過程とともに一般市民に紹介することが本シンポジウムの主な目的の1つであった。

シンポジウムでは東京湾海堡の土木史・軍事史的価値に関する研究の紹介に加え、今後の活用方法に関する討議も行われた。直木賞受賞作家の津本陽氏による冒頭の記念講演では、幕末・明治期における横須賀

海防の重要性について、たいへんロマンに富む史観が提示された。続いて、わが国の戦史研究分野における第一人者である原剛氏(防衛研究所戦史部調査員)により、東京湾海堡の建設経緯が紹介された。幕末期の海中台場(海堡)建設意見の紹介にはじまり、その後の富津海堡(第一海堡)とその増設海堡(第二・第三海堡)建設へと至る経緯、さらに関東大震災による被災やその後の戦術的重要度の低下から除籍に至る過程などが、氏の独自の綿密な調査データをもとに紹介された。さらに近時、わが国の海堡技術が米国に供与された歴史を明らかにした横須賀市市史編纂室の高村聡史氏により『東京湾海堡をめぐる日米関係』と題した講演が行われた。明治39年当時の外務省外交史料や米国国立文書館にて発掘された一次資料が紹介され、この史実が東京湾海堡における国際軍事史上の意義を大いに高めるものであることが示された。また、海堡の建設が、城の石積や和舟運搬をはじめとする日本の伝統技術と、潜水器やRCケーソンといった先進技術の融合に

依っていたことも明らかとされた。

続くパネルディスカッションでは、『東京湾口から発信する過去と未来』なるテーマのもと、東京湾学会理事長の高橋在久教授、国際臨海開発研究センターの上田寛氏、(社)日本港湾協会の小野寺駿一氏、日本経済研究センターの森野美徳氏、先述の原・高村両氏、及び筆者によって討議が行われた。海洋港湾技術史、軍事土木史などの歴史的・学際的視点に始まり、港湾・物流に対する公的関心の向上手段、あるいは“景観資産”といった現代的・大衆的視点に至るまで、きわめて多角的な議論が活発に展開された。

東京湾海堡については、本パネリストの1人である高橋在久教授を中心として2002年に結成された研究グループ「東京湾海堡ファンクラブ」によって既に学術調査や講演会、現場見学会などが定期的に行われているが、本シンポジウムはそのテーマをさらに軍事土木史、地域生活史、港湾管理、景観工学などの各分野に拡張し



シンポジウム当日の会場(提供:国土交通省関東地方整備局)海堡の価値を探求したものと見える。750名を超える参加者からは前向きな意見が多数寄せられたことから、本シンポジウムは学術面のみならず海堡への社会的関心を高める上でもたいへん大きな役割を果たしたといえよう。全国でも極めて先駆的で、かつ様々な分野からの関心を集めうる内容であっただけに、続編の開催が大いに期待されるところである。

海外土木史

イギリス土木学会「土木史研究委員会」年次会議への参加報告

JFEエンジニアリング㈱ 五十畑 弘
(鋼構造委員会「歴史的鋼橋に関する補修・補強小委員会」委員長)

2003年9月初旬に開催されたイギリス土木学会(ICE)の土木史研究委員会(PHEW)年次会議に、オブザーバーとして参加をする機会があった。

土木学会(JSCCE)で新たに発足した歴史的鋼橋の補修・補強に関する委員会の活動計画について紹介を行い、イギリスにおける事例提供の協力を申し入れることが目的であった。JSCCE鋼構造委員会では、歴史的鋼橋の補修・補強に関する新たな小委員会を今年度より3ヵ年の予定で立ち上げ、マニュアル(案)策定を最終目標として活動を開始した。今後、歴史的鋼橋の補修・補強事例が増える中であって、一定のルールと手順を示すことの必要性から開始したものである。

この調査では、事例の分析によって今後目指すべき方向を探ることになるため、過去の歴史的鋼橋の補修・補強事例の収集は、活動の重要な部分を占める。このため数多くの歴史的な鉄橋、鋼橋の補修・補強事例を有するイギリスは、調査対象として貴重である。ICEにおける土木史・土木遺産に関する調査研究の委員会は、土木史研究委員会(PHEW: Panel for Historical Engineering Works)で、約25名の委員によって構成される。会議には、委員の他にアーカイブス(図書館)から館長、副館長の2名が事務局として参加する。

定例会議はロンドンのICE本部で開かれるが、年次会議は、イギリス各地域の持ちまわりで開催される。今回は、エジンバラのヘリオット・ワット大学付属のコンファ

レンス・センターで開催された。年次会議は、3日間で定例の議題に加え、視察や夕食会も行われる盛りだくさんの内容であった。各委員が現地に着いた初日の夕方に時間を割いてもらい、JSCCEの歴史的鋼橋の補修・補強に関する委員会の活動のプレゼンと、意見交換を行った。現在、歴史的鉄・鋼構造物の保存マニュアルを策定中のスコットランド政府関係者にも参加して頂いた。PHEWの年次会議は、2日目に開催された。この会議では、各地域の新たな保存事例、土木遺産の追加登録、各地区グループの活動、およびコンクリート橋梁、ドライドッグ、棧橋、下水道、水路、石・鉄橋の7つの各小委員会の活動や、図書「Civil Engineering Heritage」(6分冊、スコットランド編のみ未刊)の発行状況、ニュースレターなどの報告がされた。

主要な審議事項としては、今後の活動案が次期委員長から示され、議論が行われた。

3日目は、大規模なメンテナンスが実施中のフォース



写真1 PHEWの会議、右側中央が委員長(2003.9.4)



写真2 補修工事中のフォース橋
鉄道橋、アーチリブの修復中の石造アーチのディーン
橋(T.テルフォード、1832年)、フォース・クライド運河、

開門、修復された世界最古の鉄道橋石造アーチのレイ・ミルトン高架橋(1812年)などの視察が行われた。

夕食会は、ICE副会長、スコットランド支部長もゲストとして出席のもと開催され、今回で委員長を退くパクストン氏の功績が称えられた。

同氏は過去13年間に亘って、PHEWの活動を委員長として主導し、歴史的土木遺産の調査、保存で数々の実績を上げた。1996年には、JSC E土木史研究委員会の招聘で来日され、秋田で開催された土木史研究発表会で特別講演された。

関連団体ニュース

日本アーカイブズ学会(仮称)発足準備大会報告

設立準備中の「日本アーカイブズ学会(仮称)」が、2004年4月の正式発足に向けて動きだした。2003年10月4日学習院大学で開かれた発足準備大会には、200人近くが参加し関心の高さを示していた。当日示された学会規約案は、前文を持つと言う型破りのもので、具体的な条文とあわせて様々な議論を呼んでいた。規約については、今後さらに検討を加えるとのことであったが、その要点について当日の案で紹介したい。

まずその前文は、アーカイブズを「団体、家および個人が作成し、収受し、保存されてきた記録からなり、手書きや印刷された紙媒体によるもの、電磁的記録のもの、オーラルヒストリーなどからなっている」とした上で、関連する学問分野と連繫しつつ「アーカイブズに関する科学的研究と実践を担うものとしてアーカイブズ学を構築し、アーカイブズの適切な生成、保存、活用による平和で豊かな民主社会の実現に資するため、この規約

を制定する。」と結んでいる。

当日は規約案の提案等に先立ち、安藤正人氏(国文学研究資料館史料館/総合研究大学院大学教授)による「戦争とアーカイブズ・「満州国」からイラクまで」とアン・ペダーソン氏(ニューサウスウェールズ大学情報システム・技術・経営学部)による「オーストラリアのアーカイブズ:オーストラリアのアーカイバブル・アプローチ序説」の2つの講演があった。特に安藤氏(前号フォーラム欄執筆者)の講演は、アーカイブズの消失(無知、災害、戦争等による)から論じたものであり、この前文を置いた意図を窺わせるものであった。

「日本アーカイブズ学会(仮称)」発足準備事務局は、学習院大学文学部高埜研究室(〒171-8588 豊島区目白1-5-1)、ホームページは <http://www.jsas.info/> であり、正式発足に先立ち、入会申込を受付けている。

(関東学院大学 昌子住江)

文化財ニュース(文化財となった土木構造等一覧)

登録有形文化財(平成15年9月答申分)

名称	所在地	建設年代	特徴等
明治村二重橋飾電燈	犬山市博物館明治村内	明治21年 / 昭和40年移築	ドイツHARKORT社製造の鑄鉄製電灯。全体を植物意匠のネオ・バロック様式で飾る。
明治村鉄道局新橋工場	犬山市博物館明治村内	明治22年 / 昭和41年移築	鑄鉄柱、小屋組材、鉄製下見板など全て国産材で造られた貴重な鉄造平屋建。
旧平磯水底線陸揚室	愛媛県西宇和郡三崎町	昭和2年	花崗岩布積の石垣上に外装ドイツ壁風のRC造上屋を築く通信用海底ケーブル陸揚用施設。
旧正野谷棧橋	愛媛県西宇和郡三崎町	昭和初期	緑泥変岩の矢筈積風構造物の先に、RC造構造物を取り付けた旧軍用棧橋。

重要文化財(平成15年10月答申分)

名称	所在地	建設年代	特徴等
丸沼堰堤	群馬県利根郡片品村	昭和6年	耐震理論構築に先駆的な役割を果たした物部長穂の設計に基づく、大規模かつ技術的完成度の高い構造物で、近代鉄筋コンクリート造河川構造物の一つの技術的到達点を示す。
三国港(旧阪井港)突堤	福井県坂井郡三国町	明治15年(同13年一部竣工)	エッセル、デ・レイケ等のオランダ人技師が、計画から施工に至る建設の全段階で中心的な役割を果たし、粗朶沈床をはじめとする自然素材を用いたオランダ技術を日本の海域に初めて具現させた、近代港湾構造物の一つの規範を示す遺構。
舞鶴旧鎮守府水道施設	京都府舞鶴市	明治33~大正期	軍部の建設による最古の本格的な水道施設であるばかりでなく、わが国最初期の重力式コンクリート造堰堤で越流式水道堰堤としては最古の桂取水堰堤をはじめとし、技術の時代的特色がよく表れた多様な堰堤遺構群がまとめて残る水道施設。

(文化庁 北河次郎、パンフィックコンサルタンツ 阿部貴弘)

平成 15 年度 土木学会全国大会報告

本年度の土木学会全国大会は9月24日から26日にかけて、徳島大学を会場に開催された。ここでは、研究討論会及び学術講演会について報告する。

本年度の研究討論会は「幻の橋梁エンジニア・増田淳再発見」をテーマに、小林一郎氏(熊本大学)を座長として開催され、参加者は約35名であった。増田淳は大正末から戦前の昭和期に活躍した橋梁設計技術者であるが、その設計図や計算書は散逸したものと考えられていた。しかし、2002年秋、増田が設計した日本各地の橋梁の設計図等が土木研究所において多数保存されていることが判明した。

3名の話者からは、1) 橋梁設計技術者・増田淳の足跡(福井次郎氏・土木研究所)、2) 増田事務所で作られた図面と20世紀初頭の橋梁技術(五十畑弘氏・JFE エンジニアリング)、3) 増田淳の活躍した時代について(中井祐氏・東京大学)と題し、増田が設計した橋梁や図面の紹介、設計図面の特色、わが国の橋梁建設にもたらしたインパクト等に関する話題が提供された。

また、討論会には増田淳の縁戚にあたる方にも出席いただき、貴重なコメントをいただいた。座長と話題提供者、さらにフロアをも含めたパネルディスカッションでは、活発な意見交換が行われた。増田淳の設計思想に関する資料はほとんど残されておらず、図面や設計書からそれを読み取るが必要とされている。すなわち、資料の保存・記録と同時に資料活用という点における問題提起がなされたものといえ、大変有意義な結果であったといえる。

一方、学術講演会では、第一日目午後「景観評価・土木史(1)」と「土木史(2)」の2セッションが開催された。「景観評価・土木史(1)」は佐々木葉氏(早稲田大学)、「土木史(2)」は原口征人氏(北海道開発技術センター)を座長とし、合わせて16件の研究発表がなされた。「景観評価・土木史(1)」では、景観評価や構造解析等に関する論文発表がなされた。「土木史(2)」では、IT技術の活用や治水史、都市計画史等に関する論文発表がなされ、研究の目標や分析結果に関する質疑がなされた。

(北海道大学 日野 智)

第28回土木計画学研究発表会・秋大会報告

去る11月27日(木)から11月29日(土)の3日間に渡って、土木学会主催(土木計画学研究委員会担当)の第28回土木計画学研究発表会・秋大会が豊橋技術科学大学において開催されたので、土木史関連セッションの研究発表の様態を報告したい。

土木史に関連する研究発表は、29日午前に「土木史(1)」及び「土木史(2)」の2セッションにおいて、計6件の発表が行われた。

「土木史(1)」セッション(司会:伊東孝氏・日本大学/コメンテータ:中井祐氏・東京大学)では、鉄道網施設戦略と都市形成へのインパクト、景勝地界隈の持つ場所的優位性を基盤とした地域景観・文化形成史、伝統的空間における景観認識構造の分析等に関して、計3件の発表が行われた。続く「土木史(2)」セッション(司会:澤田俊明氏・(有)環境とまちづくり/コメンテータ:田中尚人氏・岐阜大学)では、環状道路建設の都市計画史的評価、臨海部開発の展開とその空間構成の変遷、河道変遷と地域開発史等に関して、計3件の発表が行

われた。また、その他のセッションにおいても、土木遺産を活用したまちづくり計画に関する研究発表など、本フォーラムの特集企画とも関連する興味深い話題が見受けられた。

質疑応答では、コメンテータからのコメントを皮切りに会場参加者からも鋭い質問が飛び交い、白熱した議論が展開する場面も見られるなど、活発で有意義な議論・意見交換が行われた。

河川、道路、鉄道等様々なインフラを研究対象としながら、地域社会や都市との関係を歴史的に捉え、更にその先には将来の土木計画への発展的応用を見据えた研究が多く、土木計画学の分野における土木史研究の重要性を改めて認識させられる内容であった。

こうした研究発表会を通して、土木計画学、土木史の両分野における研究の交流と活性化が今後益々進むことを期待したい。

(セントラルコンサルタント(株) 山田圭二郎)

土木史自由投稿論文発表部門募集案内

土木史研究委員会(委員長:中村 良夫・東京工業大学名誉教授)では、来年度の第 24 回土木史研究発表会の開催にあたり、下記要領にて講演用論文を募集いたしますので、奮ってご投稿下さい。昨年からシステムが変わり、まず「講演用論文」として第 24 回土木史研究発表会でご発表いただき、後から「審査付き論文」の形にまとめていただくことになっております。ご注意ください。なお、過去の「土木史研究」に掲載された論文についての討議欄も従来通り設置しておりますので、下記の要領で投稿を受け付けております。

記

1.主 催:土木学会(担当:土木史研究委員会)

2.期 日:2004 年 7 月 3 日(土)~4 日(日)

3.会 場:岡山大学環境理工学部棟(岡山市津島中 3-1-1)

4.募集内容:

(1)論文テーマ:自由(時代、対象、範囲等、すべて自由)。

(2)論文頁数:12 頁以内(1 頁 2550 字、9 ポイント・25 字×51 行×2 段組)。

(3)使用言語:日本語もしくは英語。

5.応募方法:

(1)講演申込方法:A4 判用紙に「第 24 回土木史研究発表会講演申込」と明記し、題目(副題も可)、発表者名・連名者名・所属、会員種別、連絡先・電話番号、和文要旨(200 字程度)、過去の発表経緯、セッション分類(別記参照)を記述して、FAX または郵送にて申込み下さい。講演申込受付後、執筆要項等を送ります。

(2)講演申込締切期日:2004 年 2 月 13 日(金)必着

(3)論文原稿締切期日:2004 年 4 月 16 日(金)消印有効

注)論文は『土木史研究(講演集)Vol.24』(2004 年 7 月刊)に掲載されます。

(4)論文掲載料:論文原稿提出時にお支払い下さい。

4 頁まで 14000 円、6 頁まで 21000 円、8 頁まで 28000 円、10 頁まで 40000 円、12 頁まで 54000 円(10 頁以上は累進制を採用しております)。なお、著者負担でカラー印刷も受け付けます(1 頁あたり 5 万円程度で実費清算します)。(5)セッション分類:プログラム編成上のセッション分類のため、下記に示す講演希望セッションを二種分類で記入して下さい。なお、該当する分類がない場合は、キーワードを適宜ご記入下さい。

分野:人物史、技術史、社会・経済史(制度史を含む)、土木史一般(考古、研究方法論等を含む)、事例報告、その他
分野:教育、測量、施工法、地域・都市、景観、交通(道路、鉄道等)、河川、海岸・港湾、衛生・上下水道、構造物(橋梁、トンネル、ダム等)、防災、エネルギー、農業(灌漑等)、保存工学・保存技術、修復・復元、その他

(6)審査付き論文:第 24 回土木史研究発表会で講演用論文を発表された方に限り、発表会における討議等を踏まえた上で「審査付き論文」として投稿することができます(締切り:2004 年 9 月 24 日(金))。詳細は土木史研究委員会のホームページ(<http://www.jsce.or.jp/committee/hsce/index.htm>)をご覧ください。なお、採択された論文は 2004 年 12 月に審査の上、『土木史研究(論文集)Vol.24』(2005 年 7 月刊)に掲載されます。

6.討議欄の募集要項:

(1)討議欄の対象論文:既に『土木史研究』で発表された論文のうち、特定する論文 1 編。なお、討議欄 1 回につき 1 人 1 編とします。

(2)討議欄の種別:討議の対象となる論文によって、種別を以下のように設けます。

A:自己の過去の研究に関する新たな知見や訂正を述べるもの

B:他者の論文に関する質問、意見を述べるもの

(3)討議頁数:1/2 頁以上、2 頁以内

(4)討議書式:書式(行数、字数など)は[討議欄 A・書式見本]、[討議欄 B・著者回答書式見本]に準じますが、以下の点を留意してください。

英文題名、英文著者名、論文要旨は不要(本文は 8 行目から始める)

討議の対象論文と、討議を行う理由を本文冒頭にて簡単に記すこと

討議欄 B については討議対象論文の著者(被質問者)の連絡先を合わせて提出すること

(5)掲載の採否:土木史研究編集小委員会で採否を決定し、討議者に判定結果を通知いたします。

(6)討議欄 B の著者回答:討議欄 B の被質問者には、回答執筆依頼を送付いたしますので、内容をご検討の上、著者回答を執筆していただきますようお願い申し上げます。

(7)討議欄での著者回答と発表:討議欄 A については希望により研究発表会での発表が認められます。討議欄 B については被質問者に連絡をした上で、その回答と合わせて掲載します。ただし、討議欄 B の発表会での発表が認められていません。

(8)討議欄の掲載料:1/2 頁あたり 2000 円(討議回答については費用をいたしません)

(9)討議欄 A・B の討議用原稿提出締切期日:2004 年 2 月 13 日(金)必着

討議欄 B の著者回答原稿提出締切期日:2004 年 4 月 16 日(金)消印有効

7.送付先および問合せ先:土木学会土木史研究編集小委員会(担当職員:橋本剛志)

〒160-0004 新宿区四谷一丁目無番地、Tel.03-3355-3559 / FAX.03-5379-0125、E-Mail:hashimoto@jsce.or.jp

書名	著者・编者	発行所・発行日	定価
近代日本交通史第9巻 水の都と都市交通	三木理史著	成山堂書店・2003年10月	¥ 2,400-
全15巻刊行の第1回配本が本書。近世城下町を原型とするわが国の都市の大半は水の都である。本書は水都の代表大阪を中心に水運と都市形成を述べる。			
景観学研究叢書 テクノスケープ	岡田昌彰著	鹿島出版会・2003年10月	¥ 3,200-
ガスタンクや排気塔などの工業施設、高架橋や水門などの土木構造物が形成する特徴的な景観、いわゆる「テクノスケープ」の価値探求に挑む。テクノスケープの成り立ちや背景を追究し、さらにアートや庭園など既存の美学を手掛かりとして「景観異化」をキーワードに価値を説明している。土木史的観点からは、京浜工業地帯や荒川放水路における空間整備史、首都高速道路の景観設計史、さらに東京タワーの事業史とともに、各時代においてオブザーバーに抱かれたイメージをもとにテクノスケープの諸相に踏み込む第2章が注目に値する。写真家・福田則之氏による巻頭カラー写真「METALPHOR」も必見。			

(株)日本ランドデザイン 横松宗治

編集後記

年の瀬の慌しさにもまれつつも、委員の総力によってどうにか今号が年内中に完成をみました。ご執筆いただいた方をはじめ、委員の皆様にあらためて御礼申し上げます。次号からは、今号フォーラム欄でも記されておりますように、本誌の新たな取り組みとして、土木遺産がまちづくりに貢献した事例紹介を連載としてスタートさせます。現在、委員一同が熱い議論を戦わせながら鋭意編集に取り組んでおりますのでご期待下さい。(智)

土木史フォーラム No.25

監修：土木学会土木史研究委員会
発行：土木史フォーラム小委員会
代表者 横内 憲久（日本大学）
事務局：日本大学理工学部 岡田 智秀
〒274-8501 千葉県船橋市習志野台 7-24-1
TEL&FAX.047-469-5427(直通)
Email : t-okada@ocean.cst.nihon-u.ac.jp
<http://wf.ocean.cst.nihon-u.ac.jp/>

CONTENTS

-NEWS		
2003 Admiration of Civil Engineering heritage by JSCE		1
-FORUM		
Civil Engineering Heritages ~ Memory of technology & place ~	YOKOUCHI Norihisa	2
-LOCAL NEWS		
Discovery of Brick Greenhouse Heritage built in the Meiji era in Enoshima	KURIHARA Gaku	3
Report of the Symposium for “ Kaiho ” in the Tokyo bay	OKADA Masaaki	3
-OVERSEAS NEWS		
Report of PHEW meeting of ICE	ISOHATA Hiroshi	4
-REPORT FROM CHSCE(Committee on Historical Studies in Civil Engineering)		
Report of the Meeting to organize Japan Archives	SHOJI Sumie	5
-Civil Engineering Works on Latest Heritage Registration List	KITAGAWA Daijiro , ABE Takahiro	5
-What's On		
Report on 2003 annual meeting of JSCE	Hino Satoru	6
Report on 28 th meeting of Infrastructure Planning Review	YAMADA Keiji	6
Call for Papers of 24 th Annual Meeting of CHSCE		7
-BOOK GUIDE	YOKOMATSU Muneharu	8